

生活言語から学習言語への移行過程とその躓き

ー福山市「ことばの相談室」の事例と定型発達児の比較を通してー

伊澤 幸洋

1. はじめに

具体的な日常生活場面で自らの意思を他者に伝達する目的で使用される言語は生活言語と言われ、高度な抽象的思考を伴って学習活動に用いられる言語を学習言語と称される。生活言語から学習言語への本格的な以降は 9/10 歳頃にあるが、その予測的評価として、年長幼児の言葉の意味概念の習得に焦点を当てることとした。

2. 方法

公立こども園年長幼児 30 名（男児 19 名、女児 11 名）、平均年齢 6 歳 3.7 カ月である。独自に作成した語彙の意味概念検査と意味的説明文からの語彙想起検査（使用語彙検査）を作成した。検査に使用した語彙は年長幼児が日常的に使用することが想定される身近な 24 単語（各問題は素点 2 点満点）を採用した。加えて一般的な知能検査である WISC-V の下位検査「行列推理」と「単語」を実施した。「行列推理」は一般知能としての水準を推定するための指標として、「単語」は言語性知能の評価指標であることと共に今回作成した意味概念検査の併存的妥当性を検証するために採用した。

3. 結果

(1) 全体的評価

WISC-V「行列推理」評価点平均値は 10.4 点、「単語」評価点平均値は 10.5 点であった。「意味概念検査」の成績は 25.8/48 点（標準偏差 7.8）、「使用語彙検査」の成績は 45.1/48 点（標準偏差 3.4）であった。「単語」と「意味概念検査」および「使用語彙検査」の素点を使用した相関分析の結果、「単語」と「意味概念検査」において $r = .41$ の中等度の正の相関を認めた。「単語」と「使用語彙検査」および「意味概念検査」と「使用語彙検査」については有意な相関は認めなかった。

(2) 「ことばの相談室」利用事例

「使用語彙検査」の成績には明らかな成績低下を認めないが、「意味概念検査」において、断片的な説明に終始する傾向が強く、

4. 考察

6 歳前後の年長幼児の言語能力としては、使用言語に対する概念形成は途上にある。身近な語彙を用いた語彙を使用した意味概念検査を実施することによって、WISC-V では評価しきれない言語能力を観察することが可能である。加えて、言語コミュニケーションに躓く発達障害事例において、本検査を実施することによって質的評価ができる可能性が示唆された。